

## 「社会労働研究」の発刊によす

著者	大内 兵衛
雑誌名	社会労働研究
巻	1
ページ	2-5
発行年	1954-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00017328">http://hdl.handle.net/10114/00017328</a>

# 「社會勞働研究」の發刊によす

總長 大 内 兵 衛

法政大學の社會學部がその機關誌を出すことになつたのは、學部のため、大學のため、日本學界のためによろこぶべきことである。

日本は奇妙な國で、そのジャーナリズムにおいて大學教授が案外もてる國である。これはジャーナリズムという世界が案外貧困である證據であるかも知れない。もしそうであるならば大學教授の知識をそこに入れることは、それ自體としては決して悪いことではない。けれどもそれにはまだ反面がある。すなわちその學界に對する反作用には困つた面があるということである。それはどういふことかといへば、學者が一般にジャーナリズムを好きであつたり、ジャーナリズムをおそれたり、或はジャーナリスチックな學者を、不當に尊重したりするということである。かういつても、私は學者がジャーナリスチックであつてはいかぬといつてゐるのではない。ただ學者のうちには案外自分を知らない人がいるもので、例えば才能もない學者が下手にジャーナリスチックであると、そのことにより、彼は彼の學問を通俗化して學者でもなんで

もない人間になる恐れがある。またそういう人が多くなると、學園のアカデミックな空氣が俗化するというのであり、それは好ましくないというのである。學問というのは、本來清閑の產物である。學問をすることそれ自身がアカデミックなものである。アカデミックであるためには、ジャーナリズムを敵とすることがしばしば必要である。

日本においても、アカデミックな學術論文をのせる學術雑誌はその數も少くないが、それは著しく貧困である。日本の貧乏は敢て學術雑誌には限らないといえれば話はそれまでだが、それにしても例えば日本のジャーナリズムの華であるところのいわゆる綜合雑誌に比べて、日本の各大學が出している、いわゆる學術雑誌の貧弱さは何というさまだ。それはいかにも不體裁ではないか。その内容もいかにも貧弱ではないか。その例として日本の經濟學の學術雑誌の代表的なもの、例えば「經濟學論叢」(京大)、「經濟學論集」(東大)、「經濟學雜誌」(大阪商大)、「經濟志林」(法大)を手にとつてみたまえ。そして同時に例えば「エコノミック・ジャーナル」(ロンドン)や「エコノミック・レビュー」(ニューヨーク)や「ジャーナル・オブ・ポリチカルエコノミー」(シカゴ)と比べてみたまえ。その外觀が異なるのみではない。その内容にしたところで、彼らの方がよほど整つていないか。それよりも更にひどいのはそういう雑誌の生命のコンテニューイターである。西洋の學術雑誌は、それぞれ數十年の歴史をもつてゐる。彼らにおいては一且やりだしたら、なかなか中絶しないというのが普通である。休刊もない。廢刊もない。少くとも大きいアカデミックなものは、そういうことには知らぬ顔である。のみならず、

どの雑誌もどの雑誌も、それぞれの特色というものがある。性格がある。それが長年にわたつて一つのものとしてつづいているのである。そしてそのことにより例えば「シュモラー年報」例えば「ブラウン研究報」等々、そしてそれは多くはその主筆または主たる編集者の名と關係して定まつているのである。それはジャーナリズムではない、それは一つの學派の機關誌である。

私は東京大學において「法學協會雜誌」「國家學會雜誌」「經濟學研究」「經濟學論集」の歴史を三十年來見まつてきた。そしてその編集についても多少の關係をもつた。右の所見はこの経験にもとずくものであるが、これらの學術雑誌のいずれもが、長い歴史をもつにかかわらず、豫期したような成長をとげなかつた。ということは端的に言えば、これらの雑誌は多少づつジャーナリズムの眞似をしつつそのために却つて、時代おくれとなつて行く憾みがあるということである。これは嘆すべきことである。私はいま東大の法經學部の機關誌のことをいつたが、察するに同じような事情は、たとえば東大の歴史や哲學や倫理やに關する機關誌についてもありそうである。またさらに東大以外、例えば京大をはじめ多くの國立・私立の大學の學術雑誌全般についてありそうである。これは困つたことである。

この原因は何か、結局の話にすれば、それは日本の學界そのものが貧困だということになる。しかしさらに分析して考えれば、その原因の一つとして、ジャーナリズムがアカデミーの世界を害しているという事實があると私は思う。そのことを裏からいえば、アカデミーの空氣

がジャーナリズムの侵害に對してあまりにも操守がなく、自信がないということである。さらにその結果に着目していえばそれは資本の攻勢に對して、眞理の道場が、その道場を守り得ていないということである。私は、學問はそうであつてはならぬものをもつていると思うのである。學問は資本主義の時代をのりこえて生きねばならぬものを作らなくてはならぬのであり、そのことは學問の殿堂においてなされる。そこにはジャーナリズムの風が入らない部屋がなくてはならぬわけである。

私がこの雑誌の誕生をよろこぶのは、右のような意味である。私は教授諸君が、アカデミックスな研究の砦により、その上に眞理探究の旗をたてたことをよろこぶのである。その前進を祝福するのである。私はこの機關誌の發刊には、こういう教授諸君の意氣が現われていると思う。そういう研究の成果が、續々とこの機關誌に出るならば、それは新日本の文化の花園を十分にかざるであらう。